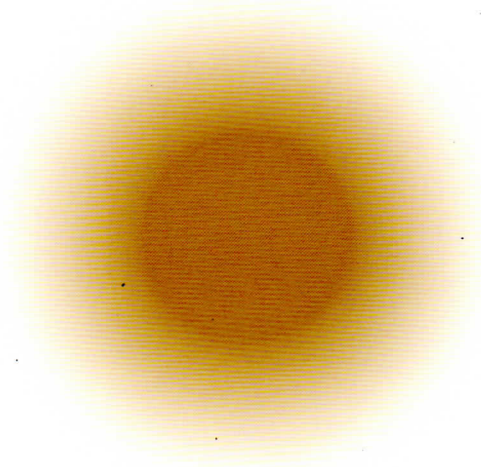


伊藤慶二+鯉江良二

土に宿すかたち — パイオニアたちの仕事 —



ごあいさつ

従来のやきものの手法に留まらず、独自の表現の領域を開拓し続ける伊藤慶二と鯉江良二の初の二人展を開催いたします。

静寂を感じさせる伊藤慶二の空間と躍動的な鯉江良二の作品群。その両氏の作品、また、作家自身の人柄も異をなしているようですが、物事には必ず二つの面があるということを示唆するかのように、どちらからも「人が生きているということ」という、命のように形の見えないものの存在を強く感じさせます。

今を生き、また生かされているという両氏の表現の根底にあるものの存在によって大きく心を揺さぶられるのです。

なぜ人は生きているのかを問うように、なぜ人はものをつくり、表現するのか？

ということの延長に美術があると思います。日常の暮らしのなかで、見過ごしがちな事に気付かせてくれるのが美術であるのかもしれませんが。目の前に見えている、やらなければならないものばかりに捕われてしまいがちですが、ふと、立ち止まり、人の心のように目には見えないものや、見えないところで起こっている事存在を認識するきっかけを与えてくれるものであって欲しい、美術は高尚である為にあるのではなく、生きる力と心の豊かさを与えてくれるものであってほしいと願っております。

その願いをまさに実践し続けているのが、このお二人ではないかと感じております。

表現を通して社会と自身とに向き合い、長年にわたり物事の本質から目を逸らすことなく制作活動が続けることは、容易なことではありません。その並々ならぬ魂の強さは穏やかに、そして、情熱的に、個々に意志を与えているかのようです。

両氏の作品それぞれに宿る魂のようなものを感じ、また、その声に耳を傾けていただければ幸いです。

最後となりますが、この展覧会の実現にあたり、同じ時代性を背景にもち、作家に生きる伊藤慶二氏と鯉江良二氏の半世紀にわたる制作活動の功績に敬意を表しますとともに、ご協力を賜りました関係者の皆さまに心より厚く御礼申し上げます。

2013年4月

楽翠亭美術館館長

石崎由則

Message

This is a two-person exhibition featuring the distinguished Japanese pottery artists, Keiji Ito and Ryoji Koie, who have transcended traditional pottery techniques by continually pushing the boundaries of artistic expression.

Keiji Ito's works express the tranquility of space, whereas Ryoji Koie's works are filled with dynamism. Although the two artists differ dramatically in both their works and personalities, they convey conceptually that everything has two sides. Their pieces seek to illustrate that while human beings are clearly alive, there exists an intangible quality of life that cannot be seen. The viewer is moved by the underlying representation of the artists' work: we are living now and are also given life.

We believe the significance of art lies in asking ourselves why we produce things just as we question why we live in this world. Art enables us to discover things that we pay no attention to in our daily life, because we tend to focus only those seemingly significant things right in front of us. It is our hope that these art works will encourage you to stop for a moment and seek out the invisible world happening beyond your everyday vision and experience. Art should, we firmly believe, play a role in enriching your mind and empowering your life. It is our conviction that the works on display by these two artists put these ideals into practice.

A fundamental struggle for all artists is to retain the essence of their work and purpose without ignoring the society and routine that surrounds them. The artists' deep strength of soul subtly instills in each work its own passionate strength of intent. We would be very grateful if you feel the soul rooted in their works and speak to the voices within.

Finally, we would like to express our utmost respect for the accomplishments going back over half a century of Mr. Keiji Ito and Mr. Ryoji Koie, and our gratitude to all those who involved in this unique exhibition.

April 2013.

Rakusui-tei Museum of Art

Yoshinori Ishizaki, Director

伊藤慶二と鯉江良二の二人展が開かれる。久しぶりのことである。両氏は共に、1970年代以降の美濃と常滑の現代陶芸を牽引してきた作家である。

定期的、継続的に個展を開き、クラフトと立体の作品をバランスよく淡々と発表し続ける伊藤。そのペースには波がない。湯呑や皿を制作する時には必ず下絵を描く。展示に際しては、個々の作品のスケッチと展示図面が独特の飄々とした洒落たタッチで描かれ、あらかじめほぼ完成した展示プランが準備される。

一方、常滑から岐阜県の上矢作へと工房を移して以降も変わらず海外のあちこちに出掛け、現地の人々と共に現地の材料でイベントのように制作し、巻き起こるエネルギーをそのまま封じ込めて作品を創り上げてきた鯉江。工房にはあれこれと人が訪れ、来客にはざっくりとした手料理をふるまう。人が好きで、大勢を動かして造る現場主義。スペースに合わせてその場で見事にインсталレーションする。

伊藤は1935年10月19日、岐阜県の土岐に生まれ、鯉江は1938年7月27日、愛知県の常滑に生まれた。

伊藤は武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）で油絵を学んだのち、多治見の岐阜県陶磁器試験場に意匠デザイナーとして勤めたことからやきものの世界に入った。鯉江は常滑高校の窯業課でやきものの基礎を学び、常滑市立陶芸研究所に入ってから現代美術に出会っている。伊藤は美術から陶磁器、クラフトへ、鯉江はやきものから現代美術へ、とたどった経緯も異なり、土岐も常滑も窯業地ではあるが、美濃の土は日常の食器に重宝される白い土、常滑の土はタイルや衛生陶器に主に用いられてきた赤い土である。山のひと海の人、近くて遠い関係でもある。

しかしながら、土岐も常滑も生産地である。雅な京都や情報の発信地である東京といった消費地にアンテナを向けながら、一方で都会の空気に迎合せず、地方ならではの距離感を大切に。異なるバックグラウンドにあって、制作の仕方姿勢もタイプも全く異なるふたりだが、共に頑固に個であり続け、群れない。それぞれを中心に若い人たちが集まり、風が巻き起こる。そうした人としての在り方が、ふたりの間に互いを認め合ういい関係を作ってきた。

伊藤は、1960年、勤務した岐阜県陶磁器試験場で日根野作三に出会う。65年に岐阜県陶磁器試験場を退職、安藤知山の窯に勤め、2年後にはガス窯を築いて本格的に作陶を始め、72年、大阪で初めての個展を開催した。鯉江は、60年代は数寄手や黒陶といった八木一夫の影響の濃い作品を朝日陶芸展を中心に発表していたが、71年に名古屋市栄公園で自身の顔を型取ったマスクに砂を詰めて並べた作品《土に帰る》を発表、それまでの走泥社に傾倒した世界から抜け出し、己の領域への一歩を踏み出した。

ふたりの出会いは、60年代の初め、伊藤の工房に鯉江が突然訪ねてきたことに始まるという。その後まもなく、鯉江を含む常滑の作家たちと伊藤、京都の佐藤敏らが集まって、毎年常滑市立図書館でグループ展を開くようになる。72年には京都勧業館で、美濃、京都、四日市、常滑、丹波、信楽の作家が一堂に展示、73年には、中村錦平の企画で金沢の日本海博覧会アートミュージアムで行なわれた「カップ国際展」に両者共出品、翌74年には名古屋で愛知の金子潤、京都の笹山忠保、佐藤と五人展を、また同年、京都でも佐藤と三人展を開催している。その際、鯉江は《土にかえる》と題して、ギャラリーの床一面に土の塊（顔）をインсталレーションしている。80年、多治見の虎渓山公園野外会場で開かれた「第1回美濃パルロイヤル展」には、河村宏三郎、中島晴美、板橋廣美を中心に伊藤、鯉江、笹山、佐藤ら12人が参加し、88年までに9回の展示を行なっている。鯉江と伊藤のつながりは常滑に始まり、京都、愛知、金沢、丹波と広がり、若手陶芸家を巻き込んで、現代陶芸の風を起こしていく。

伊藤も鯉江も早くから、反戦、反核を作品に謳ってきた。伊藤は立体（オブジェ）を作る際に、あえて器でないものを作ることを意味を自身に問い、立体の

存在理由はそのメッセージ性にあると結論づけた。73年には骨壺を連想させる作品を制作し《HIROSHIMAシリーズ—骨》とした。その後も、制作の過程でできる廃土を集めて薪窯で焼く《HIROSHIMAシリーズ》を30年にわたって作り続けてきた。

鯉江は73年ミシンを焼き（《証言—ミシン》）、時計を焼いて（《証言—時計》）反原発を形にした。77年には、赤や青の釉薬を掛けて焼いた顔を型取った塊に、《NO MORE HIROSHIMA, NAGASAKI》と名付けた。86年以降は、チェルノブイリ原発事故をアピールする《チェルノブイリ・シリーズ》を、やがて身の回りのものを全てをアルミとともに溶かしていく《森ヲ歩ク》へと変貌させる。伊藤の骨壺もまた、一昨年の東日本大震災と福島原発事故が起こってのち、《曼荼羅》や《足》といったそれまでの作品が、《祈り》へと集約される。

土と火という人為では完全にコントロールできない環境を選んで造形表現に携わること、一方で器というやきもの本来の用途性にも目を向け続けること、そして立体であれ器であれ常に強いメッセージ性を保持すること、この三つを同時に有することこそが他でもない両者の共通点である。さらにその作品に通底するのは、常に「人」、「人間としての在り方」への問いである。

伊藤は、《面》と題して人物の顔を当初は土や紙の上に線だけで表現してきた。そして2008年からは《面》が「ツラ」として立体の胸像へと進化する。鯉江には70年代から継続して、自らの顔を型取ったマスクで制作してきた《土に還る》の一連の作品群がある。自身は無論のこと、他者を描くこともまた即ち自己の投影である。鯉江が自身のマスクを用いたのは、究極のアイデンティティを求めた末の最期の手立てとして自分自身をそのまま投げ出したわけだが、一方伊藤は、ひとつひとつ、ゆっくりと慎重に面を簡略化し象徴化することで、自分の中の人間像を抽出していった。

直接的に人間を表わしたものだけではない。彼らが手掛けた《HIROSHIMAシリーズ》にしても《チェルノブイリ・シリーズ》にしても、愚かな行為が目前に突きつけられることで、われわれは常日頃忘れがちな人間という生きものに再度直面させられる。伊藤の《足》は仏足であるが、時に人そのものである。《尺度》もまた、われわれ人間の生きざまを投影している。鯉江が国内外のあちこちで制作し遺した足跡はそのまま人間の生きた証である。伊藤が廃土で《HIROSHIMAシリーズ》を作り続けたように、鯉江はそれぞれの場所の泥を紙に流した《泥-ing》を遺していく。それは人間の負の排泄物として、われわれが生きていることと表裏一体のものとして生まれ出て続ける。

今回の展覧会では、両者の歩みを一望にすることができる。伊藤は《面》のシリーズを中心に《曼荼羅》、ドローイング、文具、茶道具、茶盤の数々と、近作《いのり》、そして現在精力的に描いている人物画。鯉江は、《ブラボール》（1993-94）、《土の顔》（1996）、《井の顔》シリーズ、《泥-ing》、《森ヲ歩ク》、アルミを流して固化させた《蛇行する形》のインсталレーション、そして新作の引出黒茶盤。

高度成長期からバブル期を経て平成まで、およそ半世紀をめぐり疾走してきたふたり。両者の軌跡にはそのまま陶芸の現代史が映し出される。そして現在、奇しくも伊藤は「描く」ことへと還り、そして鯉江は、黒茶盤を手掛けている。共に歩きながらも決して重なることがない、相手を想い敬い、自らは己れの道をゆく、このかけがえのない関係が、今、私たちに実に心地よい空間を提供してくれているのである。

It is many years since Keiji Ito and Ryoji Koie last held a two-person exhibition. Both artists have led the field of modern ceramics in Mino and Tokoname since the 1970s.

Keiji Ito, born in Toki in Gifu Prefecture on 19th October in 1935, has regularly held his own exhibitions, displaying works that exhibit a balanced combination of craft and object. He makes it a rule to make sketches when producing cups and plates. Every time he presents these works, he prepares an almost complete exhibition plan: a sketch of each work plus a map of the whole exhibition in a distinctive and easygoing manner.

Born in Tokoname in Aichi Prefecture on 27th July in 1938, Ryoji Koie has traveled extensively to various countries, collaborating with local artists and creating works using indigenous materials. His work embodies his strong inner energy and all those passionately involved in not only the exhibition but also the process leading to it. At his private studio, which he moved from Tokoname City in Aichi Prefecture to Ena City in Gifu Prefecture, Koie welcomes visitors with relish and serves his own dishes. As he enjoys the company of other people, his works are often produced in collaboration with other staff under his direction. His installations are impressively in tune with the given space.

After studying oil painting at Musashino Art University, Ito was employed as a designer at Gifu Prefectural Ceramics Institute, which led him to the world of ceramics. Koie studied the basics of ceramics at Tokoname High School and encountered modern art when entering Tokoname City Ceramics Institute. Ito switched from art to ceramics whereas Koie moved from ceramics to modern art. Although Toki and Tokoname are famous for ceramics, the two regions differ in the quality of earth; Mino is rich in white clay appropriate for tableware, whereas Tokoname is rich in red mountain and field clay mainly used for ceramic tiles and sanitary ware. One is from a mountainous region and the other from a coastal region; they seem close yet are far apart.

While both Koie and Ito look to the elegance of Kyoto and the inventiveness of Tokyo, neither of them follows the crowd, putting a distance between the big city and their bases for production. Although both artists differ completely in their backgrounds and their attitudes towards production and style, they have one core principle in common: they are both uncompromising individuals who forge their own path. Young people seek to become their disciples and a new movement has grown up around the two, while their shared personalities have led to a mutual respect.

In 1960 Ito met Sakuzo Hineno at Gifu Prefectural Ceramics Institute, where Hineno was an advisor, and he retired there in 1965. Thereafter, he worked at the kiln of ceramic artisan, Chizan Ando. Two years later he built his own gas-kiln and a studio to start his career as a ceramist, holding a one-person exhibition in Osaka in 1972. Koie, on the other hand, produced Kokuto and Shiwayosede, works greatly influenced by Kazuo Yagi and showed them mainly at the Asahi Ceramics Exhibition. In 1971 Koie presented Return to Earth, a work in which he used a mold of his own face to press out numerous Koie faces in pulverized, previously fired porcelain. He turned his focus away from the world of Sodeisha, one of the most influential ceramic groups ever formed in Japan, and produced works uniquely his own.

Their encounter dates back to 1960s when Koie suddenly visited the private studio of Ito. Soon after, Koie and other ceramists from Tokoname, and Ito and Satoshi Sato from Kyoto, embarked on annual group exhibitions at Tokoname City Library. In 1972 they held an exhibition with other ceramists from Tokoname, Yokkaichi, Tanba, Shigaraki. In 1973 they both exhibited their works at the Cup International Exhibition presented by Kinpei Nakamura, held at Nihonkai Expos Art Museum in Kanazawa. In 1974 they had a five-person exhibition in Nagoya City with Jun Kaneko from Aichi, Tadayasu Sasayama and Satoshi Sato. In the same year they also participated in a three-person exhibition with Sato, where Koie set up an installation of faces made of clay on the whole floor of the gallery. In 1980 they participated in the 1st Mino Battle Royal Exhibition held at a park in Mt. Kokei in Tajimi City with 10 other ceramists including Kozaburo Kawamura, Harumi Nakashima, Hiromi Itabashi, and Sasayama and Sato. Subsequently, until 1988 nine exhibitions were held there. Koie and Ito's

artistic collaboration was rooted in Tokoname, spreading to Kyoto, Aichi, Kanazawa and Tanba, resulting in a new wave of modern ceramics involving bright young ceramists.

Both Koie and Ito have advocated anti-war and nuclear abolition, and strongly represent these principles in their work. When Ito made objects, he questioned the significance of not creating actual utensils concluding that the existence of objects rested upon messages within. In 1973 Ito produced a series of works titled Hiroshima Series, which the viewer associates with urns. For the next 30 years he continued to create these works by collecting pulverized, previously fired porcelain and using a wood-fired kiln. Koie produced Testimonies-Sewing Machine and Testimonies-Alarm Clock by burning real machines in order to express his nuclear abolition stance. In 1977 he used a mold of faces and baked them with blue and red glazes applied, and these were entitled NO MORE HIROSHIMA AND NAGASAKI. After 1986 he produced the Chernobyl Series to bring the accident to public attention. Later, he moved on to Forest Walk, in which he fused everything around him with aluminum.

Both artists share three principles in common: engaging in artistic expression through the controlled elements of earth and fire; always remembering the fundamental function of pottery as a useful object; and finally retaining a strong message in their work. In addition, flowing through their works is a sense of humanity and what humans should aspire to.

Initially, Ito began his series of Men (face) by expressing human faces on clay and paper with just lines. In 2008 Men(face) evolved into objects of human busts -Tsura(face). Koie was still producing his series of "Return to Earth", which he had begun to work on in 1970s and in which he used a mold of his own face. Drawing himself or others is both a reflection of himself. Koie used a mold of his own because he wanted to represent himself as he was and while simultaneously seeking the ultimate identity. Ito, on the other hand, attempted to seek a human image of his own by slowly and carefully simplifying and symbolizing his Men or Tsura(face).

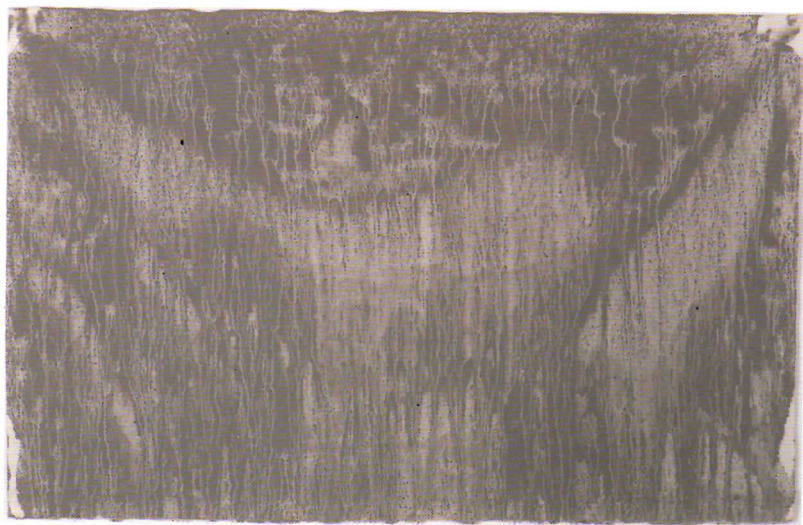
Their work directly expresses the human condition. The Hiroshima Series and Chernobyl Series particularly make the viewer realize the true nature of humanity, which we are inclined to forget in everyday life, through exposure to their often ill-considered behavior. Ito's Soku(foot) are supposed to be Buddhist footprints, but they can sometimes be interpreted as human ones. Syakudo(Scale) is also a reflection of how human beings live. Koie has exhibited his works both in Japan and abroad, and his legacy is also a direct testament to human. Just as Ito continued to produce his Hiroshima Series using pulverized, previously fired porcelain, Koie leaves his Doro-ings (mud drawing) by using local clay on a sheet of paper. Both of these remain alive as the negative imprint of human beings, the reverse side of human existence.

This exhibition affords the viewer the opportunity to trace the footsteps of both artists. Ito's works include some works of Tsura(face) Series, Mandara, drawings, stationary, tea ceremony tools, tea bowls, works from his recent series Inori(prayer), and portraits, which recently he draws vigorously. Koie's works include Los Bravos, Clay Face, Inogashira Series, Doro-ing(Drawing)-Message in Clay and Water, Forest Walk, an installation of Winding Shapes, where he poured aluminum into the earth and solidified it, and his latest works, Black Tea Bowls.

For the last half-a-century from the period of Japan's high economic growth, through the Bubble Economy to the present Heisei period, both artists have blazed their own unique path and are amongst the defining artists in Japan's modern history of ceramics. Oddly, Ito has returned to drawing and Koie to black tea bowls. Although they both have something in common, they never meet at the same point, respecting each other and forever going in their own direction. This rare relationship provides us with a uniquely comfortable art space.



44.



45.



46.

44. ブラボール Los Bravoles 1993-94

45. 泥-ing - 土と水のメッセージ Doro-ing (Drawing) - Message in Clay and Water 1994

46. 土に還る Return to Earth 1996